

ลมจากกรุงเทพฯ

バンコクの風



JSPS

BANGKOK

NEWSLETTER

2018-19 Vol.1

Wat Rong Khun
ワット・ロンクン(タイ)



JSPS BANGKOK

CONTENTS

JSPS主催事業説明会の開催	01	センター活動記録	15
バンコク研究連絡センターの主催セミナー・	06	コラム	16
参加イベント		学術情報 (2018年4月-6月)	18
JSPS同窓会情報	11		
特集「JUNThai の今後の展望について」	12		
京都大学ASEAN拠点			
柴山 守 教授			



センター長挨拶

バンコク研究連絡センターの活動報告書「バンコクの風」の2018年度第1号（2018年4－6月分）をお届けします。

本報告書がカバーする期間は、毎年そうですが、各地の大学を訪問し、JSPSの国際事業を紹介するガイダンスセミナーを集中的に開催しています。翌年度事業への応募締め切りが、9月、そして申請手続きは、すべて日本側のホスト（もしくは共同）研究者によってのみ可能という条件があるため、締め切りまでの2、3か月をかけて日本のホストと十分な打ち合わせができるよう配慮して開催しています。この毎年恒例のガイダンスセミナーは、直接大学の先生がたにJSPS国際事業を紹介できること、そしてそれらの先生方から率直な疑問や質問を受けるいい機会になっています。そのいくつかは報告の中で紹介しておりますので、お目を通して頂ければと思います。

西日本を襲った豪雨は、多くの死者や未曾有の被害を残しました。復旧の先行きが未透明な中、国会では、豪雨被害の救済をそっちのけで、参議院の定員増や、IR法案（いわゆるカジノ法案）などが会期末のどさくさに紛れて、与党の強行採決のような形で採択されました。これに限らずこの数年の国会状況は、日本の民主主義の崩壊を示しているように思えて仕方ありません。「驕れるもの久しからず、盛者必衰」の・・・」謙虚さこそが、日本が世界に誇れるものだったのに・・・

2018年7月吉日

JSPS バンコク研究連絡センター長

山下 邦明

JSPS 主催事業説明会の開催

バンコク研究連絡センターは、タイを中心に担当国の大学等高等教育や研究機関を訪問し、JSPS 事業説明会を行っています。当センターが訪れた機関の紹介と事業説明会の様子をお伝えします。

メーファールアン大学で JSPS 事業説明会を実施 (5/17)



タイ最北部チェンラーイ県のメーファールアン大学で JSPS 事業説明会を実施しました。同大学は今年 9 月で設立 20 周年を迎える比較的新しい国立総合大学で、当センターによる事業説明会は 3 回目となります。今回は約 15 名の方にご参加いただきました。

冒頭に同大学副学長の Dr. Chayaporn Wattanasiri から



歓迎のご挨拶及び大学のご紹介をいただき、続いて山下センター長から当会の概要説明、富山副センター長から外国人研究者招へい事業、研究拠点形成事業等、各種国際事業の説明を行いました。その後の質疑応答では、論博事業の応募資格詳細や外国人特別研究員（一般）の選考で重視される点は、といった具体的な質問をいただき、当会国際事業に対する関心の高さを伺うことができました。

左から: Dr. Chayaporn 副学長と山下センター長



(JSPS Bangkok Office ホームページ: <http://jsps-th.org/2018/05/17/6288/>)

JSPS 主催事業説明会の開催

チェンマイ大学で JSPS 事業説明会を実施 (5/18)



左から: 箕輪国際協力員、新原国際協力員、富山副センター長、山下センター長、Dr. Piyapong Niamsud

タイ北部チェンマイ県にあるチェンマイ大学で JSPS 事業説明会を実施しました。同大学は 1964 年に設立された国立総合大学で、緑に囲まれた広大で美しいキャンパスが大変印象的でした。今回の事業説明会は約 25 名の方にご参加いただきました。



左から: 山下センター長と Dr. Avorn Opatpatanakit

説明会に先立ち同大学学長補佐の Dr. Piyapong Niamsud を表敬訪問し、近年の当会二国間交流事業の採択状況等について情報交換しました。説明会では、冒頭で Dr. Avorn Opatpatanakit 副学長に歓迎のご挨拶をいただき、続いて山下センター長・富山副センター長から当会の概要・同窓会組織の説明、新原・箕輪両国際協力員から各種国際事業の説明を行いました。

その後、チェンマイ大学の当会国際事業経験者である Dr. Phonpat Hemwan (Lecturer, Faculty of Social Sciences, 論博事業)、Dr. Phisit Seesuriyachan (Associate Professor, Faculty of Agro-Industry, 研究拠点形成事業) にご自身の経験をお話いただきました。お二人からは、一度での申請では採択とならなかったご経験など、今後申請を検討している方にとって大変参考になるお話を伺うことができました。



Dr. Phonpat Hemwan (論博事業により駒沢大学で博士号を取得)



Dr. Phisit Seesuriyachan (研究拠点形成事業に参画中)



(JSPS Bangkok Office ホームページ: <http://jsps-th.org/2018/05/18/6298/>)

JSPS 主催事業説明会の開催

カセサート大学で JSPS 事業説明会を実施（6 月 6 日）



カセサート大学カンペンセンキャンパスで JSPS 事業説明会を実施しました。カセサート大学は 1943 年設立の国立総合大学で、タイ国内ではチュロンコン大学、タマサート大学に次いで長い歴史を持っています。今回の説明会には、修士課程・博士課程の学生を含む約 20 名の方々にご参加いただきました。

冒頭で同大学の Asst. Prof.

Dr. Tiwa Pakoktom (Head of Research and Academic Service Center, Faculty of Agriculture at Kamphaeng Saen) から歓迎のご挨拶をいただき、その後、山下センター長、富山副センター長から JSPS の概要、新原・簗輪両国際協力員から各種国際事業の説明を行いました。

最後に、論博事業により京都大学で博士号を取得された Dr. Suratwadee Jiwajinda から、ご自身の経験に基づいたアドバイスをいただきました。Dr. Suratwadee は JSPS タイ同窓会 (JAAT) の理事でもあり、JAAT の活動紹介も併せて行っていただきました。質疑応答では論博事業の申請要件や、二国間交流事業（共同研究・セミナー）の申請・審査プロセスについて具体的な質問が多くあり、有意義な説明会となりました。



左から: Dr. Tiwa Pakoktom と山下センター長



Dr. Suratwadee Jiwajinda



(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2018/06/06/6340/>)

JSPS 主催事業説明会の開催

ブラパー大学で JSPS 事業説明会を実施（6 月 22 日）

ブラパー大学バンセンキャンパスで JSPS 事業説明会を実施しました。同キャンパスは海にとっても近く、キャンパス内の海洋科学研究所（Institute of Marine Science）には一般に公開された立派な水族館が併設されています。今回の事業説明会は約 20 名の方々にご参加いただきました。



Mr. Phonchai Chai-in

冒頭で Mr. Phonchai Chai-in (Director of Global Relations Center)、及び Dr. Nawasit Rakbarmung (Assistant President for International Relations) から歓迎のお言葉をいただき、続けて山下センター長から説明会の機会をいただいたお礼を述べ、JSPS の概要説明を行いました。

その後、富山センター長からバンコク研究連絡センターの役割や JSPS 同窓会組織の説明、新原・簗輪両国際協力員から各種国際事業の説明を行いました。

最後に、論博事業により広島大学で博士号を取得された Dr. Khwanruan Srinui (Senior scientist, Institute of Marine Science, Burapha University) からご自身の経験をお話いただきました。Dr. Khwanruan には現在 JSPS タイ同窓会 (JAAT) の理事も務めていただいています。質疑応答では各種招へい事業の審査プロセスや JSPS として重視している研究分野はあるのか等、具体的なお質問を多くいただきました。



Dr. Nawasit Rakbarmung



Assoc. Prof. Dr. Sunantha Osiri (Vice President for Research Support Affairs)



Dr. Khwanruan Srinui



(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2018/06/22/6390/>)

JSPS 主催事業説明会の開催

タマサート大学で JSPS 事業説明会を実施（6 月 29 日）



Mrs. Pornpimon Boonsiri (右)



Dr. Duangjai Lorthanavanich (左)

タマサート大学ランシットキャンパスで JSPS 事業説明会を実施しました。タマサート大学は 1934 年設立の国立大学で、タイ国内で 2 番目に長い歴史を持っています。今回訪れたランシットキャンパスはバンコクから北に数十キロ進んだところにあるパトゥムターニー県にあります。説明会は冒頭で Mrs. Pornpimon Boonsiri (Director, Research Administrative Division) からご挨拶をいただきました。続いて富山副センター長から JSPS の概要、新原・箕輪両国際協力員から各種国際事業の説明を行いました。



Asst. Prof. Dr. Chatchai Marnadee (右)

その後、JSPS 事業経験者で、現在タマサート大学で勤務されている 2 名からご自身の経験についてご講演いただきました。Asst. Prof. Dr. Chatchai Marnadee (Department of Mechanical Engineering, Faculty of Engineering) は論博事業により神戸大学で博士号を取得されました。論博の申請手順や、日本で行った研究についてお話いただきました。

Dr. Duangjai Lorthanavanich (Associate Dean for Student Affairs, Thammasat Business School) は 2014 年度の外国人研究者招へい事業（長期）により京都大学で研究をされており、世界遺産・熊野古道の管理運営について調査をされました。今回は日本での研究生生活について詳細にご説明くださいました。約 20 名の方にこの説明会にご出席いただき、質疑応答では研究拠点形成事業の審査プロセスや論博事業の申請要件など、多くの質問が寄せられました。



(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2018/06/29/6429/>)

バンコク研究連絡センターの主催セミナー・参加イベント

バンコク研究連絡センターでは、対応機関であるタイ学術会議（NRCT）と学術セミナーを共催しているほか、タイ国内外で実施される国際的な学術シンポジウムやイベントに積極的に参加し、ASEAN 地域の最先端の学術情報の収集に努めています。

タイ高専コース開講記念式典に出席（5月3日）

タイ教育省職業教育局（Office of the Vocational Education Commission:OVEC）でタイ高専コース開講記念式典が開催され、当センターから富山副センター長と新原国際協力員が出席しました。

タイ教育省は専門知識と実践経験を兼ね備えた優秀なエンジニアの育成を目的に、国立高等専門学校機構（高専機構）と連携して日本の「高専教育」を導入し、今月よりタイ国内初となる5年制の高専コースが開講されることとなりました。

高専コースが開講されるのはチョンブリ・テクニカルカレッジ（エレクトロニクスコース）と、スラナリ・テクニカルカレッジ（メカトロニクスコース）の2校で、式典は各校の高専コース1期生も出席し、賑やかに行われました。

高専機構は2016年12月にOVEC内にタイ・リエゾンオフィスを設置し、教育省と密な連携をとれる体制を整えています。今回の高専コース開講にあたり、テクニカルカレッジの教員を日本に招いての研修実施や、1期生の入試の際にはスタッフを日本から派遣して補助を行うなど、人的交流も盛んに行われたとのことでした。

教育省の Surachet Chaiwong 副大臣、高専機構の谷口功理事長のスピーチでは今後の高専コース拡大への期待、そして1期生への激励の言葉が聞かれました。



1期生を代表して挨拶する学生



タイ教育省 Surachet Chaiwong 副大臣（左から8番目）、高専機構谷口功理事長（同9番目）

（JSPS Bangkok Office ホームページ：<http://jsps-th.org/2018/05/03/6236/>）

バンコク研究連絡センターの主催セミナー・参加イベント

国際交流基金 日本語パートナーズ第6期レセプションに出席（5月9日）

国際交流基金（Japan Foundation）の日本語パートナーズ第6期レセプションが Jasmin City Hotel で開催され、当センターから山下センター長、富山副センター長、新原国際協力員、簗輪国際協力員の4名が出席しました。

「日本語パートナーズ派遣事業」は2014年から開始され、アジア各国の中学・高校へ人材を派遣し、日本語・日本文化教育の支援を行っています。タイでは今回が第6期目となり、タイでは過去最大となる80名の日本語パートナーズが国内の高校80校に約10ヶ月間派遣されます。

冒頭の国際交流基金バンコク日本文化センターの吉岡憲彦所長の挨拶では、日本語パートナーズに対する期待や、日本の文化を伝えるだけでなくタイの文化を学び、自己研鑽の機会としてほしいと激励の言葉が述べられました。

日本語パートナーズ派遣事業についての詳細は国際交流基金ウェブサイトをご覧ください。



国際交流基金バンコク日本文化センター吉岡所長



来賓と日本語パートナーズ（一部）による集合写真

(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2018/05/09/6260/>)

在チェンマイ日本国総領事館を表敬訪問（5月18日）

在チェンマイ日本国総領事館を表敬訪問しました。

今回の表敬訪問は、昨年引き続き、チェンマイ大学での事業説明会実施後に総領事館にて川田一徳総領事と青木敦史領事にご挨拶の機会をいただいたものです。

川田総領事からは現在タイ国内で関心が高い研究領域は何かといったご質問や、当会も支援を行っている二国間・多国間共同研究の実施意義についてご意見をいただきました。

在チェンマイ日本国総領事館は「北部タイ大学生日本語スピーチコンテスト」を毎年開催されており、優勝者は後援の上智大学へ1年留学できることもあり、タイ北部で日本語を学ぶ大学生にとって大きなモチベーションになっているそうです。

（関連記事）https://www.sophia.ac.jp/jpn/news/PR/2017/20180301news_hokubu.html

当センターはバンコクを拠点に活動しておりますが、今回の事業説明会実施や表敬訪問により、チェンマイを中心とした北部地域においても日タイの研究者交流・学生交流が盛んに行われていることを実感することができ、大変貴重な経験となりました。



川田一徳総領事（左から3番目）、青木敦史領事（右端）

（JSPS Bangkok Office ホームページ：<http://jsps-th.org/2018/05/18/6313/>）

バンコク研究連絡センターの主催セミナー・参加イベント

在タイ日本国大使館・JASSO 主催「JUNE Fair」に参加（6月4日）

在タイ日本国大使館で開催された JUNE Fair に参加しました。

JUNE Fair は日本政府国費外国人留学生（研究留学生及び学部留学生）のタイ国内申請期間に合わせ、在タイ日本国大使館と日本学生支援機構（JASSO）が共催しているイベントです。多くの学生が申請書提出のため大使館を訪れるこのタイミングで、日本の教育機関について情報収集できる場を設けることで国費留学に限らず日本への留学を促進することを目的としています。

JUNE Fair 初日となった当日は、25 の大学・日本語学校等がブースを構え、訪れた学生・保護者に積極的に情報提供を行いました。資料コーナーではブースを出展していない機関のパンフレットも数多く入手することができるようになっていました。当センターのブース出展は初日のみでしたが、JUNE Fair は6/8（金）まで開催され大変盛況だったとのことでした。



(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2018/06/04/6333/>)

第15回在タイ大学連絡会（JUNThai）に出席（6月18日）

在タイ日本国大使館で第15回在タイ大学連絡会が開催され、当センターから山下センター長、富山副センター長、簗輪国際協力員、新原国際協力員、Natthida リエゾンオフィサーの5名がオブザーバーとして出席しました。

在タイ大学連絡会（Japanese Universities' Network in Thailand: JUNThai）はタイにオフィスを構える大学間の情報交換、相互連携、教職員のネットワーク強化を図るために2015年1月に発足し、現在は3か月に一度のペースで開催されています。

第1部の講演会ではチュラロンコン大学の Dr. Surachat Bumrungsuk 教授（Department of International Relations）から“Back to the Future: Thai Politic 2018”と題した講演と、福井工業大学 ASEAN 事務所



Dr. Surachat Bumrungsuk

所 梶皓人所長から同事務所の活動についてご紹介がありました。

第2部の連絡会では大分大学の内田助教が議長を務め、前回から継続協議事項になっていた「JUNThai の今後について」、意見交換が行われました。



福井工業大学 ASEAN 事務所 梶皓人所長

この議論の背景として、近年の大学タイ事務所の急増があります。当初20数大学の緩やかな情報交換の場としてスタートした JUNThai は、現在では加盟校が50校を超えています。事務所設置の目的や常駐スタッフの有無など大学により状況が大きく異なる中、JUNThai もその運営方法の見直し、今後の在り方の検討が必要な時期を迎えています。

今回は京都大学 ASEAN 拠点の柴山所長から改めて JUNThai 設立の経緯が説明された後、有志メンバーで今後の在り方を検討するワーキンググループを作り、そこで議論された結果を基に今後の JUNThai で協議するのはどうかとの提案があり、その場で承認されました。



大分大学内田助教



京都大学 ASEAN 拠点柴山所長



山下センター長

最後に、連絡事項として山下センター長から8/9（木）に実施された NRCT-JSPS-JAAT セミナーについて説明し、出席者へ当日の参加を呼びかけました。

（JSPS Bangkok Office ホームページ：<http://jsps-th.org/2018/06/18/6373/>）

バンコク研究連絡センターは、日本学術振興会の国際交流事業で訪日経験のある研究者の組織である「JSPS 同窓会」の支援も積極的に行っており、現在管轄地域内に同窓会が組織されているタイ・バングラデシュ・フィリピン・ネパール・インドネシア JSPS 同窓会の活動支援、また、ベトナム・マレーシアでの新規同窓会設立に向けても支援を行っています。

2018 年度第 1 回 JSPS タイ同窓会（JAAT）理事会に出席（4 月 25 日）

今年度第 1 回目の JSPS タイ同窓会（JAAT）理事会をタイ学術会議（NRCT）で開催しました。冒頭に山下センター長から JSPS バンコク研究連絡センターの新任スタッフ 3 名（富山副センター長、新原国際協力員、簗輪国際協力員）の紹介があり、その後、前回（2018 年 2 月 8 日開催）の JAAT 理事会及び総会の議事録の確認・確定、JAAT の 2018 年度活動計画、会計報告、JAAT 会員の募集、広報についての理事会での議論により、今年度も 8 月のタイ Research EXPO の際に JSPS-NRCT-JAAT 共催シンポジウムを開催することとなりました。その他、2 月の論博メダル授与式など、前年度と同時期に開催することが確認されました。



(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2018/04/25/6230/>)

今回の特集では、京都大学 ASEAN 拠点所長 柴山 守 教授に、「JUNThai の今後の展望について」と題して、ご寄稿いただきました。

※寄稿の記事・論文、図表、写真等の著作権は執筆者に帰属しています。無断複製又は無断転載はおやめください。

JUNThai の今後の展望について

京都大学 ASEAN 拠点所長 柴山 守

1. JUNThai の目指した方向とは

JUNThai 在タイ大学連絡会は、2015 年 1 月に発足した。連絡会設置の話題が持ち上がってから早くも約 4 年、タイに進出する大学は倍増し、2018 年度には約 50 大学を超える大学がタイに進出、オフィス等を設置した。そのオフィスは、主にバンコクを中心にしながらもランジット、ナコーンパトム、コンケン、チェンマイにまで至り、留学生のリクルートや短期学生交流など教育を中心にした活動、研究プロジェクトの連携や推進、現地諸機関との連携・ネットワークの拡大、さらには ASEAN 地域への活動を展開するハブや拠点としての活動も展開されており、米国や EU をみても他に類をみない規模である。

タイ国に進出し、国際化を目指す各大学の活動は、前述のように多岐にわたり（図 1 参照）、異文化の中にあって、制度、習慣、オフィス経営など多様な予想外の困難に直面する。とりわけ、タイ国での在留資格の取得、効果的な運営のための知識共有は、いずれの大学にも共通する問題で、当面解決すべき喫緊の課題であった。

こうした背景もあって、2014 年タイにおけるクーデター（2014 年 5 月 22 日）以降から、日本学生支援機構（JASSO）の積極的な情報共有の働きかけと諸活動に参加しつつ、アソークに事務所をもつ諸大学、在タイ日本国大使館、日本学術振興会バンコク研究連絡センター（JSPS）などから大学連絡会設置の話が持ち上がった。幾多の大学等関係者の意見交換を経て、文科省等の動きをもにらみながら、2014 年 11 月暫定幹事、呼びかけ人が決まり、2015 年 1 月設立総会開催に至ったのである。

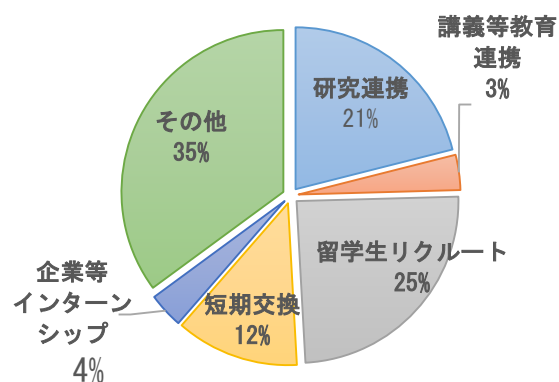


図 1 タイに進出している大学の活動内容

設置当時の目的は、タイ国における諸大学との学術交流を推進するため、諸課題や現地における社会・制度・風土・文化・生活などに関する環境や知識を相互に交流し、教職員の親睦を深め、「知」を共有することとし、以下の各項目が掲げられた。

- (1) タイと日本の大学の学術交流等における諸課題や喫緊の課題に対する情報交換・共有、
- (2) タイの大学等学術機関の動向や活動について学ぶ機会を得ること、
- (3) 現地における教職員の親睦と豊かで充実した生活をおくるための交流、
- (4) 大学間における相互の連携や協力、
- (5) 学生交流や留学生の募集に関する情報交換、
- (6) タイ国内の大学等に対する日本の大学の連絡先案内など

こうした目標に沿って、大学あるいは現地事務所等の独自性をベースに、緩やかな関係をもって主体的に運営することに心がけると共に、学術交流等の相互協力の推進を目指すために、在タイ日本国大使館、JSPS、JASSO などとも連携することで JUNThai 活動が始まった。

2. これまでの活動と現状

JUNThai 発足後、これまでの活動は、表 1 に示す通りである。毎回約 40 名から 80 名の参加があった。テーマから推察される通り、教育・研究・留学生交流・インターンシップ制度等の日本の大学の諸活動と共に、タイ国における高等教育、入試制度からタイの政局に至るまで、また個人のユニークな研究事例までも含めた報告がなされた（図 2 参照）。こうした約 3 年 6 ヶ月に至る JUNThai 活動は、言うまでもないが諸大学の輪番制による幹事・事務担当の絶大な尽力によるところが大きい。

表 1 これまでの JUNThai 開催状況

開催日	テーマ	報告内容・報告機関
第 1 回 2015 年 1 月 12 日	設立総会	「タイ国における高等教育」OHEC
第 2 回 2015 年 3 月 9 日	大学間ネットワーク	「ASEAN University Network」AUN
第 3 回 2015 年 7 月 20 日	インターンシップ	「インターンシップ事例」長岡技大
第 4 回 2015 年 9 月 15 日	日本の学術振興	「日本学術振興会の紹介」JSPS
第 5 回 2015 年 12 月 14 日	学生交流	「学生交流事例」福井工大
第 6 回 2016 年 3 月 14 日	研究連携・交流	「研究連携事例」京大・JASTIP
第 7 回 2016 年 6 月 13 日	産学連携	「産学連携」芝浦工大、明治大
第 8 回 2016 年 8 月 29 日	人材育成・文化交流	「産業人材育成」大使館、NRCT、JF
第 9 回 2016 年 12 月 19 日	タイ国入試制度・高等教育	「タイ国入試制度」KMUTT、「ASEAN 高等教育」SEAMEO
第 10 回 2017 年 3 月 20 日	タイ科学技術振興	「タイの科学技術教育振興」IPST、JTREP 財団
第 11 回 2017 年 3 月 21 日	ASEAN 課題、留学	「将来の食糧問題」明治大、「留学への提案」JSR
第 12 回 2017 年 9 月 4 日	研究事例紹介	「研究・交流事例」大分大、「歯科医療」東京医科歯科大
第 13 回 2017 年 12 月 18 日	タイ留学交流・大学事情	「文科省国費留学」大使館、「タイ大学事情 20 年」バンコク大学
第 14 回 2018 年 3 月 19 日	研究事例	「トウモロコシ畑土壌」JIRCAS、「研修制度」TPA
第 15 回 2018 年 6 月 18 日	タイ政局・オフィス事例	「タイの政局」CU、「ASEAN 事務所活動事例」福井工大

また、当初の念願であった法人格取得では、NPO、NGO、駐在員事務所として認可される事例も生まれた。一方で、最近では在タイに駐在する大学教職員の異動・本邦との往来や諸大学の活動の新たな展開によって、幹事・事務担当の困難さも現れている。そして、連絡会の代表幹事設置や規則、活動原資の確保などの新たな課題に直面しつつある。

それは、タイ側の学術に関する動きにも関連し、注目しなければならないことである。2015年度大使館主催産業人材育成円卓会議でのタイ政府教育相の JUNThai に期待する言

及、タイ産業界からの大学連携（スマート社会実現）への模索、Thailand4.0 にもとづく高等教育の充実と産業人材育成や EECi への参画、タイ国諸大学の日本の大学との連携強化やフェア開催など、直近ではタイ政府教育省と科学技術省の統合までメディアで報道されるに至っている。また、本邦機関等との関係では、文科省が推進する日 ASEAN 科学技術イノベーションによる連携や日系企業による人材育成への要請など、そのスピードは我々が想像する以上に速い。



図2 2016年8月29日 第8回在タイ大学連絡会 79名参加

3. 新たな JUNThai の発展を目指して

前述したタイ国や本邦諸大学における状況の変化は、これまでの JUNThai の在り方そのものにメスを入れる時期に来ているとも思われる。JUNThai 活動の理想的な姿とは、多様な議論が存在するであろうが、盤谷商工会議所の事例（東京農工大・河井栄一氏のことば）が相応しいかもしれない。タイ学術諸機関と日本の諸大学の連携がさらに展開・深化して、双方共に Win・Win 関係を築くためには、まずは JUNThai が在タイ日本国大使館、JSPS、JASSO と緊密な連携をとりながら事務局体制の確立やタイ側から「見てもらえる」大学群としてタイ社会に貢献するべく、新たな意見交換の開始が当面の課題であろう。

【参考資料】

- ・在タイ大学連絡会設置趣意書（2015年1月12日承認）
- ・柴山 守：日本の約50大学がタイに進出－産学連携を目指す動きも－、盤谷商工会議所所報、pp.20-24, 2017.7.
- ・俵 幸嗣：微笑みの国「タイ」における日本留学事情と日本語教育、語学交流、Vol.31, October 2013.

センター活動記録

バンコク研究連絡センターの2018年4月から6月期のその他活動は以下のとおりです。センターにはタイ及びASEAN諸国との学術の国際交流を目的とし、日本やタイの研究者や高等教育関係者が訪れます。当センターは訪問者への現地での便宜供与や学術情報の交換・助言を行っています。詳しい活動記録は当センターウェブサイト (<http://jsps-th.org/>) に掲載しておりますのでご参照ください。

4月

- 3日 九州大学 渡邊公一郎副理事・留学生センター長の来訪
- 10日 福井工業大学 ASEAN 事務所 梶皓人所長の来訪
- 11日 九州大学 玉上晃理事・事務局長らの来訪
- 19日 京都大学大学院医学研究科修士課程 上利尚大さんの来訪
- 23日 タイ教育省 Mr.Poramet Charoynoot の来訪

5月

- 8日 東京国際大学法人本部 Eトラック企画部 上遠野統括課長の来訪
- 8日 岡山大学 大安喜一教授、藤井浩樹教授の来訪
- 10日 JICA 業務調整員 小熊誠さんの来訪
- 22日 京都大学 ASEAN 拠点 柴山守所長らの来訪

6月

- 8日 国立遺伝学研究所 産学連携・知的財産室 鈴木睦昭室長の来訪
- 12日 東亜大学 櫛田宏治学長の来訪
- 20日 東北大学 滝沢寛之教授、遊佐訓孝准教授の来訪
- 25日 JSPS バングラデシュ同窓会理事の来訪

新原国際協力員の東南アジア見聞録① -バンコクは日本人だらけ-

早くも第1四半期が終わりました。住んでみてここバンコクはとても国際色豊かな街だと改めて実感しています。世界各地の人が集まっているので、6月のワールドカップは各々の国の応援でスポーツバー等は大盛り上がりでした。タイはワールドカップに出場していませんが、タイ人は各自応援するチームを決めて楽しんでいました。

訪れたことのある方はわかると思いますが、バンコクはとても日本人の多い街です。外国人の中でも日本人は一大勢力と言えるでしょう。具体的な数字をあげると、少し前ですが平成28年10月時点の外務省統計では、50,966人の在留邦人（日本国籍で、3ヶ月以上の長期滞在者と永住者の合計）がバンコクにいたそうです。この数字は在留届の数をカウントしたもので、実際は10万人くらいいるとも言われていますが、細かいことはマイペンライとして私は「バンコクには日本人がだいたい5万人いる」と考えることにします。

私の地元福岡県で人口5万人の街を調べてみると、朝倉市、筑後市、筑紫郡那珂川町（今年10/1から福岡県那珂川市となる）あたりが5万人前後の人口です。福岡の人にしかわからないような例を出して恐縮ですが、こういった街の人口と同等数以上の日本人が外国の一都市にいると考えると、バンコクにどれだけ多くの日本人が集結しているか、少しイメージしやすくなりませんか？

話は変わりますが、私たち「国際協力員」は大学の事務職員を対象とした研修の一環としてJSPSの海外研究連絡センターで勤務する機会を得ています。この研修に職員を送り出す各大学が一番期待しているものは一体何でしょうか？大学以外の機関、しかも海外で勤務する「経験」は大変貴重ですが、そういったものは人の目に見えず、数値で測れるものでもありません。帰任後の大学での実務を考えると、やはり「語学スキルの向上」の方が送り出す側としては期待するのではないかと私は考えています。（もちろん海外勤務せずとも語学はいくらでもできるのですが、現地で過ごしながら学ぶ、というのはやはり大きいと思います。）

その語学スキル向上に関してバンコクはどのような環境かというと、国際協力員が派遣されている8つの海外研究連絡センターの中でも特に自分を律する必要がある場所ではないか、と（勝手ながら）考えています。というのも、ここバンコクには日本人はどこにでもいると言っても過言ではないほど多くいますし、タイ人の方も日本人の扱いに慣れている方が多く、英語・タイ語があまりできなくても快適に生活自体はできてしまうのです。きっとこういった面もバンコクに居着く日本人が多い理由の一つでしょう。もちろん英語圏から来ている方もたくさんいるので英語、そして現地語タイ語の練習はいくらでもできます。しかし、人間常に易きに流れるもの。気を抜けば大したスキル向上もないまま帰国を迎える可能性も十分あるでしょう。



【5月5日こどもの日、日本人街の Sukhumvit 33 には鯉のぼりがあがっていた】

3ヶ月経った私の現状はというと、タイ語学習に力を入れています。昨年10月にゼロからスタートし、タイ赴任後に文字の読み書きに着手しました。初めは超難解に見えたタイ文字ですが、最近は割と読める（音がわかる）ようになってきました。音はわかるけど、その意味がわからないのでいちいち調べるのが大変なのですが、覚えた単語が街なかの看板等に出てきたときの喜びは格別です。最近ではタイ文字が可愛いと感じてきたので慣れてきた証拠でしょう。この滞在中の目標として、11月の実用タイ語検定試験で3級（英検3級のレベル）に合格したいと思い、それに向けて勉強しています。6月に試しに4級を受けたら「不合格」でしたので一層気を引き締めて取り組んでいます。



【いつも昼食をとっている食堂の看板】

バンコクから北に80kmくらい行くと世界遺産で有名な古都アユタヤがあります。先日観光してきましたがツアーの中で「アユタヤ日本人町跡」なるところに連れて行ってもらいました。聞けば、14世紀頃から日本人が移住を始め、最盛期は約3,000人の日本人が住んでいたとのこと。江戸幕府の鎖国政策を機に日本人町は消滅したそうですが、特に事前の勉強をせずにアユタヤに赴いた私は、昔から日本人とタイは縁が深いのだなあ感慨深いものがありました。日本人で溢れている現在のバンコクとこのアユタヤ日本人町に関連はないのかもしれませんが、きっと昔の人もタイに愛着を感じて過ごしていたのだらうと思います。アユタヤは、タイの歴史についてももっと理解を深めていきたいと感じさせてくれる場所でした。



【日本人町跡石碑】

あっという間に過ぎ去った当初の3ヶ月、寝ても覚めても日本の真夏のような気候に少し体は疲れている気はしますが、私は日々の生活を楽しめています。赴任当初、山下センター長から面白い話を伺いました。バンコク駐在員が頻繁に発症する病、通称「（バンコクに）イタイイタイ病」の話です。たしかに、バンコクには一度ハマってしまうと抜け出せない魅力があるような気がします。私も来年3月の帰任時にはこの病を患っているのかもしれませんが。しかしそれはこの研修生活が充実していた証拠とも言え、そうなれるように公私ともに色々なことにチャレンジしていきたいと思います。

平成30年度国際協力員 新原卓（九州大学）

■研究開発プロジェクトが加速傾向

ベンチャー企業から提供された 30 のプロジェクトの大学の資金は商業目的

チュラロンコン大学はテクノロジー分野の 30 の研究開発プロジェクトを年末までに商業化することを目指している。

同大学のアントレプレナーシップとイノベーションマネジメントプログラムの責任者 Nongnuej Muangsin 氏によると「研究開発を行うと共にテクノロジーや革新的方法を取り入れることにより、学生によるベンチャー企業立ち上げを支援するプログラムがチュラロンコン大学で開講される。」とのことだ。

このプログラムはデザインシンキング、クリエイティブシンキング、プロダクトイノベーション、アントレプレナーシップ、サービスイノベーションなどの領域を網羅している。

学生はオーグメンテッド・リアリティ、バーチャルリアリティ、ナノテクノロジー、3D プリンティングおよびデータ解析について学ぶ。

ここでは利用者の立場に立った製品やサービスを創り出すために、専門家に意見を求める機会や、学んだ技術を利用して、利用者の立場に立った製品やサービスを実際に創る機会が与えられることに加え、利用者の立場に立った製品やサービスを研究するための研究室が提供される。画期的な製品およびサービスを作り出すために、学生の持つアイデアを活かすことが奨励される。

このプログラムでは、テクノロジーとイノベーションに関する 100 を超える分野の研究開発プロジェクトを実施している。その一つは、Fresh2Joy プロジェクトと呼ばれる皮が柔らかいフルーツの貯蔵寿命を延ばすためにカプセルにいれられたビーズを利用するプロジェクトである。このプロジェクトではカビによりフルーツが傷んでしまう問題に取り組んでいる。この取り組みにより皮が軟らかいフルーツの貯蔵可能期間を 3 日から 10 日に延ばすことが可能となった。

他には Fresh2Joy パウダーと溶液に関するプロジェクトもある。カットフルーツはすぐに鮮度が落ちて茶色く変色しがちだが、このプロジェクトでの取り組みにより、活性成分を安定化させることに成功し鮮度をより長く保つことができるようになった。

大学では近い将来二つのプロジェクトについて米国内で資金調達を行う予定である。

「このプログラムは、意欲的な起業家が提供する製品やサービスをより良いものにしていくためのサポートをすることで、スタートアップの創出と発展に寄与する。彼らは大学でのトレーニングプログラムと研究開発から利益を得るだろう。」

「また、タイおよび海外の市場において国際基準に合致した製品およびサービスを提供できるでしょう。」と Nongnuej 氏は述べている。

彼女によると、このプログラムにより科学技術省のテックファンドプロジェクト等のエンジェルファンドを含めた学生と投資家間のマッチングファンドのやり取りが促進される。これは大学での新たなビジネスエコシステムを立ち上げることに伴い、更に学生たちが自らの目標を達成するための 3000 万バーツの予算が確保されており、製品化の前の試作品で、各プロジェクト当たりおよそ 10 万バーツの資金を提供する計画もあるという。

(2018 年 4 月 11 日 Bangkok Post 紙)

■新しい中道派政党、テクノロジー政策を推進

タイ国内のいくつかの主要産業は新しいテクノロジーの前に姿を消しつつある中、タイに“流動性のある民主主義”を導入することを目指す、新興のテクノロジーに対する造詣が深い者たちにより結成された“中道派政党”の政治への影響は大きなものとなるだろう。

穏健派、もしくは中道派の設立者である Chumpol Krootkaew 氏は、有権者が真に政治的な決定に参加するために新しい技術を用いることを考えている。古代ギリシャの直接民主制にヒントを得たということだ。

Chumpol 氏はタイ国立電子コンピューター技術研究センターで以前幹部および研究員を務めていた経歴を持つ。

Chumpol 氏は以下のように述べている。

「政治が決めれば、今や全ての人が政治家になることが出来る。現代は望むことをかなえるテクノロジーが十分すぎるほどあふれている。

ブロックチェーンの技術がデジタルデモクラシーを支持する人から脚光を浴びているが、そのほかの技術も検討されている。」

「既成政党は根深く対立しあっており、多くの国民からその存在を疑問視されている。

その代替として、穏健派は“流動性のある民主制”を提示する。」

「それほど多くの人口を抱えていなかった時代であれば、直接民主制により問題は直接議論され決定されていた。しかし今や、テクノロジーによって我々はより良い方法をとることが可能になった。それが、“流動性のある民主制”だ。」

「まるで金融取引のようにコンピューターやモバイルアプリケーションを利用してある問題に対する自分の意思を決定することが可能になった。しかし本当に大切なのはテクノロジーが直接的な意思決定をする以上のことをもたらすことなのだ。」

「これは異なる問題に関する意思決定について、どの政治家を選ぶのかということである。ある政治家に任せてうまく行かないとなれば、彼らはいつでも他の政治家を選ぶだろう。これが“流動性”ということだ。まるで金融資産のように大きな流動性をもたらす。国会議員が4年に渡って意思決定権を独占することは不可能になるだろう。」

「議会代表制による政治がうまくいなくなりつつある国では、このような動きが民主制の未来となると考えられる。しかしテクノロジーと国会議員は並存するだろう。システムが整備されたら、国会議員は個々の問題に対する意見調整のために有権者と意見を交わす。国会議員たちは議会で投票する前に、直接国民の意見を聞くこともできる。」

Chumpol氏は新しい党に対する選挙管理委員会の承認を待っている。

(2018 年 4 月 17 日 The Nation 紙)

■高等教育省が間もなく発足

教育省によると、高等教育を担当する新しい省が7カ月以内に発足予定とのことだ。

「最近実施された教育省再編の道筋を検討する委員会の会議で、高等教育のための新しい省の立ち上げに関する提案が可決された。この新しい省は教育省とは別の組織となる予定である。」

「また、新しい省に新規の予算や職員を付ける予定はない。この新しい省の設置にあたっては、教育省の規模を縮小し新省には教育省の監督下にある高等教育委員会(Ohec)を合併させるとしている。

つまり教育省の規模を縮小した分は、新しい省の元に入ることになる。Ohecが扱っていた案件は、新しい省が担当する。新省の発足後は、Ohecの事務局長は新省の事務次官になる。」

「職員数の増減がないので、新省の発足に異議を唱える者は誰もいないだろう。Ohecの職員も、高等教育省が発足した際は全員そちらに移ることになる。」と教育大臣のTeerakiat Jareonsettasin氏は昨日語った。

また、教育省副大臣のUdom Kachintorn氏は以下のように述べている。

「公共部門開発委員会事務局長Thosapon Sirisamphan氏から得た情報によると、高等教育省の立ち上げに関する関連法は二週間以内に完成し、その後閣議に回されるとのことである。」

「高等教育省は研究に関する明確なミッションを持つべきだ。つまり国家として戦略的に実施している計画および政府の進めるタイランド4.0に対する支援である。この新省は一人の大臣により所管され、関連機関は事務次官事務局の監督下に置かれる。」

「また、新省は法律により規制されている大学の自治について監督をおこなわない。」

高等教育コースを提供している職業訓練校に関しては、引き続き教育省の職業教育委員会事務局の監督下に置かれる。」

(2018 年 4 月 25 日 Bangkok Post 紙)

■タイとフランスの研究チームがサラセミアの新治療法を発表

タイとフランスの臨床研究チームが世界初となるサラセミア（遺伝性血液疾患）の遺伝子治療による治療法を発表した。著名な遺伝子治療の専門家であるDr. Philippe Leboulch（パリ大学及びハーバード大学医学大学院）がリーダーを務めるこの研究チームによると、この新たな技術はフランスで来年までに一般向けの治療として導入されるということだ。タイではまだ臨床実験中であるため、もう少し時間を要す見込みである。

この研究チームが12名のサラセミア患者に施した臨床実験の結果は、4月19日付けのThe New England Journal of Medicineに掲載された。ベーターサラセミア患者はタイをはじめとする東南アジア諸国で特に多く、タイでは毎月輸血を必要とする深刻なベーターサラセミア患者が年間約3,000人生まれている状況である。この輸血による治療を行ってもなお、患者の平均余命は健常者と比べ短い傾向がある。ベーターサラセミア患者を抱える国は、その治療により大きな財政的負担を強いられている。

Dr. Philippe は以前ベータサラセミアと鎌状赤血球症への有効性を示した論文を著した後、マヒドン大学の Dr. Suradej Hongeng と Dr. SuthatFucharoen と協力し、LintiGlobin と呼ばれるこの遺伝子治療によるアプローチの臨床実験を多くの患者を抱えるタイで行った。

「治療用ベクターを用いてベータグロビン細胞を患者の血液幹細胞（異常細胞除去後）に半永久的に埋め込むのだが、臨床実験を行った 12 名はタイで最も多いベータ⁺やベータ E/ベータ 0 サラセミア患者で、有効な細胞の注射後、今では輸血がいらない状態となっている。」と Dr. Philippe は述べた。

対象となった 12 名全員が治療に成功しているため、この結果は非常に前向きに捉えられるものである。彼らの症状が再発することなく、治療の効果が継続することが期待されている。Dr. Philippe 曰く、LintiGlobin の安全性は抗がん剤ブスルファンのそれと同等レベルだということである。

「フランスで来年までにこの新しいサラセミア治療が行われることになり、ヨーロッパ諸国から徐々に広がっていくだろう。」と Dr. Philippe は言う。

この新しい治療法に掛かる費用はまだ固まっていないが、Dr. Philippe は政府の補助により患者の負担額は常識的な範囲に抑えられるべきだと主張している。

「患者が元気になり、子どもの頃から続けている毎月の輸血からも開放されることを嬉しく思う。彼らは学校や会社に行き、スポーツを楽しみ、普通の生活を送っている。」Dr. Suradej はこう述べた。

彼は、既存のサラセミア治療法は価格が高い上に副作用も多く、社会保障制度の大変な重荷となっていることについても指摘した。

1 人の患者に毎月の輸血を 30 年間行うコストは、1,000 万バツに達する。そしてタイ赤十字社の血液ストックの 40% をサラセミア患者が使用している計算になるのである。

現在、唯一効果的と言われている治療法は血液幹細胞を適合ドナーから移植することであるが、サラセミア患者のうち 25% しか適合ドナーを見つけることができていないのが現状である。

(2018 年 5 月 3 日 The Nation 紙)

■タイが自動車用ソフトウェア開発の拠点となる未来

「自動車用ソフトウェア開発において、タイがアジア太平洋地域の拠点となる可能性は多いにある」。Toyota Tsusho Nexty Electronics Thailand (NETH) 社長兼 CEO の大越浩一氏はこう述べた。

NETH の主な事業は自動車用ソフトウェアの開発である。同社はタイを拠点に自動車用ソフトウェア開発を行い、開発したソフトを日本へ輸出している。

同氏によるとタイのエンジニアはソフトウェア開発においてアジア太平洋地域の中でも比較的高い技術を持っているということだ。

NETH の親会社である NEXTY Electronics Corporation 社長の青木厚氏は、アジア諸国には十分な技術を持ったエンジニアが豊富にいるが、特にタイは過去数年自動車用ソフトウェアの開発に携わっているという点で強みがあると述べている。

同氏は、ソフトウェアの自動車への利用は今後生産性の向上とともに拡大して行くものの、自動車生産の現場とソフトウェア開発の現場が切り離されていると、どれだけ大きな予算が割り当てられたとしても効率的な自動車用ソフトウェアの開発は困難であるとも考えている。

過去 15 年ほどの期間日本とタイは協力しともに成長を遂げてきたが、これは特にハイブリッド車や電気自動車といった自動車用ソフトウェアを活用する部門で顕著であったということだ。

青木氏によると、日本が現在自動車用ソフトウェア開発の拠点となっているのは、アジア太平洋地域の主要なソフトウェア会社が既存の市場向けにソフトウェア開発していたのに対し、日本の車製造業者は新しい市場を開拓し、所謂「ブルーオーシャン」を作ること成功し、競合に先駆けて商品を作ることができたからだという。

「それに加え、日本人の『Kaizen の精神（継続的に改良・改善を図る精神）』が仕事に活かされている。それが顧客の日本国産車に対する高い満足度に繋がっている。市場が求める商品を作ってきた結果、日本が自動車用ソフトウェア開発の拠点となったことは特段驚くべきことではない」。同氏はこのように続けた。

同社 Chief Technology Officer (最高技術責任者) の井倉将実氏は、今後タイがアジア太平洋地域において自動車用ソフトウェア開発の拠点となるための NETH の役割は何かという問いに対し、「当社の業務経験を積ませることで、将来の優秀なエンジニア育成に貢献すること」と答えた。さらに、「そういった経験は将来タイでエンジニアのプレゼンスを高めることに繋がる。その実現のため、タイの主要大学に埋もれている優秀なエンジニアの発掘に協力は惜しまない」と付け加えた。

井倉氏は、自動車用ソフトウェアの開発はドライバーと同乗者の生命に直接関わるものだと考えている。小さな誤りが彼らを危険に晒してしまう。それゆえ、より良いものを生み出すためのたゆまぬ努力と高いモチベーションが欠かせないのである。

一方、先述の大越氏は欧米や日本で行われている自動運転を実現するための種々の実験についても言及し、「タイでも自動運転が実現できるよう最善を尽くす。それがこの国への貢献になる」と述べた。

4 月上旬、NETH は協働する民間企業や政府関係機関とともに第 2 回目となる自動車用ソフトウェアに関する学生ミーティングを開催し、大学生に自動運転車両を制御するソフトウェア開発のスキルを披露するコンテストが行われた。

このコンテストは来るべき「未来の車」時代へ向け、自動車用ソフトウェアの人材開発を促す目的で開催され、タイ国内の大学から選抜された 12 のチームが参加した。

今回、優勝はキングモンクット工科大学 (KMIT) ラカバン校の LKB48 チーム、準優勝は KMIT ノースバンコク校の Double E チームとなった。第 3 位の KM-IT トンブリ校の Antman チームはグッドデザイン賞も受賞した。

(2018 年 5 月 7 日 The Nation 紙)

■タイと不平等な課題

政府は、IT インフラ 6 部門におけるより効果的なサイバーセキュリティの枠組みを公表し、1000 名のサイバーセキュリティ人材を養成するための 3 億 5 千万バーツの資金拠出を承認した。

デジタル経済社会省大臣 Pichet Durongkaveroj 氏によると、「国家サイバーセキュリティ委員会において“なりすまし”を含む現代のサイバーセキュリティの脅威に対し、より効果的に対処するためにこの枠組みが承認された。」とのことだ。

この枠組みは、電話通信、安全保障と公共サービス、公共交通機関および物流、銀行業務および金融、エネルギーおよび公益事業および公衆衛生の、計 6 つの IT インフラ部門を対象としている。

また、なりすましやサイバー攻撃元の特定、サイバー攻撃に対する予防的措置の実行、システムの監視、セキュリティの向上およびダメージを受けたシステムの修復を行う。

また、Pichet 氏は以下のようにも述べた。

「Prayut 首相が議長を務める会議では、1000 名のシステムアドミニストレーター、システム利用者、および民間部門の技術者を含むサイバーセキュリティ人材の養成計画についても承認される。」

「合計 3 億 5 千万バーツにのぼる資金は、デジタル経済社会基金から拠出される。」

「更に、日本政府による ASEAN・日本サイバーセキュリティ能力開発センターが設立されたこともこの取り組みを後押しすると思われる。」

「委員会は、電子取引開発機構およびサイバーセキュリティ保護に関するタイコンピューター緊急対応チームのメンバーにより結成される暫定のサイバーセキュリティ機関を承認した。」

「内閣はサイバーセキュリティ法に基づいた常設のサイバーセキュリティ機関をまもなく立ち上げる。」

「これは、タイが国としてサイバーセキュリティシステムに関与するということであり、更にはサイバーセキュリティへの取り組みが進んでいる国のランキングで上位 20 か国入りを目指すということだ。」

会議に先立ち Prayut 首相は「データ保護法の強化は政府の義務だ。この法律により国家のデータプライバシーを保証することは国際基準に沿っており、インターネットユーザーの懸念を払しょくすることに繋がる。」と述べている。

(2018 年 5 月 10 日 Bangkok Post 紙)

■タイムズの大学ランキングでチュラロンコン大学は 126 位

今年の the Times Higher Education's Emerging Economies University Rankings に、タイの大学は 10 校がランクインした。

なお、去年は 9 校であったので一校増えた形となる。

このランキングには、アジア、アフリカ、ヨーロッパ及び南米諸国の合計 42 か国から 378 校の大学が掲載されている。

タイの大学ではマヒドン大学がトップで、昨年と同じく 76 位にランクインした。

キングモンクットトンブリ工科大学は昨年の 91 位から 92 位に下がった。

また、チュラロンコン大学が昨年の 117 位から大幅に順位を落とし 126 位となった。

スラナリー工科大学が 192 位から 177 位と躍進した一方、キングモンクットラカバン工科大学は 145 位から 181 位と順位を下げた。

チェンマイ大学は 165 位から 195 位に、また昨年 200 位以内に入ったコンケン大学は、今年は 200 位以内に入ることはできなかった。

カセサート大学とプリンスオブソクラー大学は 251 位から 300 位のグループに入った。また、今年からランキングに名を連ねたキングモンクットノースバンコク工科大学は 301 位から 350 位のグループに入っている。

マヒドン大学、キングモンクット工科大学トンブリ校そしてチュラロンコン大学は Times Higher Education (THE) のアジア大学ランキングでトップ 10 入りしている。

国際ランキングの編集長 Phil Baty 氏は以下のよう

に述べている。

「躍進した大学もある一方で、今年のアジア地域の高等教育機関の順位は下落傾向にある。」

「各大学が研究水準の向上や国際化の推進により、世界的な評価を得ること、そして研究の影響力を高めることがこのランキングで順位を上げるためのカギとなる。」

「このような国際水準のデータを用いて比較する方法を採用すること自体、非常に重要なことだ。大学の質とレベルを上げる公正な競争、大学間協力、国際的なネットワークの構築を推進するからだ。」

「タイは高等教育分野の発展に特別な可能性を秘めた国である。若年層、急伸する高等教育のニーズおよび研究成果の増加などの条件が揃っているからだ。」

全てのランキング結果と分析は以下より確認できる。

<https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings/2018/emerging-economies-university-rankings>

水曜日、タイ学長会議の代表である Suchatvee Suwansawat 氏は以下のように述べた。

「このランキングの結果をもって、タイの大学は水準が低いとみなすべきではない。」

「例えば一つの言語で教育を行っているので優れているとされる大学もあるのだろう、そしていくつかのタイの優れた大学はこのリストに入っていない。」

「とはいえ、これらの国際ランキングは確実に有益であるので無視すべきではない。タイの大学にカリキュラムの修正を促すことになるのだから。」

(2018 年 5 月 10 日 Bangkok Post 紙)

■科学技術大臣、新省の案を擁護

科学技術大臣 Suvit Maesincee 氏は、社会科学と人文科学分野の軽視について批評家から懸念の声が上がっていたことを踏まえ、科学技術省と高等教育委員会 (ohec) および国立の研究機関を合併した新省においてはそのようなことはないことを強調し、昨日行われた新省発足に関する会議の場で、

「社会科学および人文科学研究は研究社会発展基金を通して支援される。それらの分野の研究が国家にとって重要であることに変わりはない。」と発言した。

同氏は次のように述べている。

「新省は中国科学院をモデルとしており、名称は未定であるが、タイランド 4.0 の目標達成に必要な人材育成のため学術機関における研究とイノベーションの実現を支援することになっている。

この新省の元、3 つのファンドが設立された。

1 つ目はタイの大学が世界ランキングでの上位入りを支援する高等教育研究および研究開発基金、2 つ目は、新規事業立ち上げを支援する競争基金、3 つ目はラジャパット大学を支援する研究社会開発基金である。

資金不足だけでなく明確な研究戦略もないタイの大学にとって、この新省は真に必要なものだ。

「国内で実施されている研究のうち 10% しか実用化されているものは 10% しかないのが現状である。この状況の改善は、それぞれの大学グループへの資金援助に関する方針および資金源を明確にできるかどうかにかかっている。」

タマサート大学の前学長 Somkid Lertpaitoon 氏らを始めとする教育関係者からは、新省の支援対象は科学とイノベーションのみにとどまるのではないかと懸念の声が上がっている。

チュラロンコン大学教育学部講師の Sompong Jitrakub 氏も高等教育省の発足計画に係る混乱を懸念している。

同氏は「合併計画は元の高等教育省の設立のコンセプトとは異なるものになっている。特に高等教育機関の長を交えたうえで、より一層の議論が行われるべきだ。」と述べている。

政府はタイ大学長会議(CUPT)、ラーチャパット大学学長会議およびラージャマンガラ工科大学学長会議とのミーティングを来週実施し、合併について議論する。

首相府大臣の Kobsak Pootrakool 氏は、この新省は来年の総選挙前に公式に発足する予定であり、新省設立のための 3 件の法案は、3 カ月以内にプラユット首相が法案に関して議会の意を問うことなく承認できると定めた 44 条項を発動させることなく承認され、新省が発足するだろうとの見通しを示した。

(2018 年 5 月 26 日 Bangkok Post 紙)

■新省は 2 月に発足の見込み

記者会見で科学技術大臣の Suvit Maesincee 氏は、新科学省は 2 月の総選挙前に発足する予定であり関連法案が 8 月に内閣に提出されることを発表した。この記者会見では科学技術省と大学を管轄する高等教育局(OHE)の統合案に関する最新情報が発表された。OHE は現在教育省の管轄であるが、政府は更なる改革を推進するために今回の統合を決定したという。

今後発足予定の新省のもとでは、国家科学技術開発庁(NSTDA)が経済成長および大学による関連分野の研究に対する支援を実施することで、科学技術振興に対する主要な役割を果たすことになる。Suvit 氏は科学省の調査部門である NSTDA の組織と予算に関する改革に早急に着手することを望んでおり、「新省の発足が承認される前であるが、その要となる NSTDA から改革を始めたい。」と述べた。

(2018 年 6 月 19 日 Bangkok Post 紙)

日本学術振興会バンコク研究連絡センター アクセス&コンタクト

アクセス

高架鉄道 (BTS) Asoke 駅、1 番出口から徒歩 5 分
地下鉄 (MRT) Sukhumvit 駅、1 番出口から徒歩 5 分

コンタクト

1016/1, 10th floor, Serm-mit Tower, 159
Sukhumvit Soi 21, Bangkok 10110, Thailand
Tel +66-2-661-6533 Fax +66-2-661-6535
Website: <http://jsps-th.org> Email: jspsbkk@jsps-th.org
facebook: JSPSBangkok



■ 表紙写真紹介



Wat Rong Kun (วัดร่องขุน) (チェンライ、タイ)

タイの古都チェンライに建築され、因習にとらわれないデザインによって国内外を問わず有名となった寺院。

元画家のチャルムチャイ・コーシッピパット氏が 1997 年にデザインしてから、地震による一時中断を経て現在に至るまで建築が続いている。

これまでの寺院建築の伝統を覆す真っ白に塗られた外壁、随所に隠されたシュールレアリズムを彷彿とさせるメッセージ性の高いオブジェなど、見るものを飽きさせない魅力がある。

■ 編集後記

国際協力員の簗輪(新潟大学)です。皆様のお力添えにより、2018 年度第一号のバンコクの風が無事発行の運びとなりました。

今回の特集記事は、京都大学 ASEAN 拠点柴山先生より「JUNThai の今後の展望について」というテーマで御寄稿頂き、タイに進出している日本の大学の今後についてわかりやすくご説明頂きました。ご多忙中にもかかわらず、執筆のお手間を取って頂き心よりお礼申し上げます。

第 2 四半期には、タイ国内外で同窓会関係のシンポジウムが実施される時期となりますので、スタッフ一同気が引き締まる思いです。バンコクの風を受けて漕ぎ出す JSPS バンコクセンターを今後ともよろしく願います。

(バンコク研究連絡センター 国際協力員 簗輪 知佳)

JSPS バンコクニュースレター「バンコクの風」

監修：山下邦明 編集長：富山大

編集担当：簗輪知佳、新原卓